

イギリス資本輸出史研究

入江節次郎

新評論

著者紹介

いゝえ ねつじろ
入江 節次郎

1921年 岡山市に生まれる

1944年 東京帝国大学法学部卒業(旧制の岡山一中・六高を経て)

現在 同志社大学経済学部教授 経済学博士

専攻 世界経済史

主著 『独占資本イギリスへの道』(ミネルヴァ書房)

『帝国主義論序説』(ミネルヴァ書房)

『帝国主義論への道』(ミネルヴァ書房)

『帝国主義の解明』(新評論)

共編著 『帝国主義研究 I 帝国主義論の方法』(御茶の水書房)

『帝国主義研究 II 帝国主義の古典的学説』

(御茶の水書房)

『講座 西洋経済史 III 帝国主義』(同文館出版)

主要論文 「重工業資本主義と資本輸出」(河野健二他編)

『世界資本主義の歴史構造』岩波書店、所収)

連絡先 京都市上京区今出川通相国寺門前東入

同志社大学光塩館内 (〒602)

イギリス資本輸出史研究

(検印廃止)

1982年9月25日 初版第1刷発行

1982年11月25日 初版第2刷発行

定価 7000 円

著 者 入江 節次郎

発行者 二 瓶 一 郎

発行所 株式会社 新 評 論

〒160 東京都新宿区西早稲田 電話 東京(202)7391番
3-16-28 振替 東京 6-113487番

落丁・乱丁はお取替えます 印刷凸版印刷
製本 鈴木製本所

© 入江節次郎 1982

3033-330176-3177

Printed in Japan

は し が き

資本主義の世界性の認識への道 日本における西洋経済史研究の新路線敷設の地固めになることを私かに念じながら、この書物は、執筆されたものである。この新路線とは、資本主義経済体制の世界的性格の認識を基底に定置させて、その体制の世界的展開の内容を盛り込んだ経済史を建設していくように方向づけられているものである。

だが、日本における経済史の学界は、なお一般的にはこの認識を自家薬籠中のものにするまでにはいたっていないように思われる。私自身についても、こうした認識を確立するにいたるには、かなり長い研究上の遍歴を経なければならなかった。私の主著の刊行の跡を顧みながら、まずはこの認識の確立への契機について告白的に述べていくことにしたい。

本格的な最初の私の学術書である『独占資本イギリスへの道』（ミネルヴァ書房）が刊行されたのは、いまから20年以上前の1962年2月のことであった。その当時まで頭から否定的に考えられていた第1次世界大戦前のイギリスの独占資本の再検討が、そこでは主題とされた。その結果、たしかにその形態は、後発資本主義国のドイツやアメリカ合衆国のそれとは異なっていることが明らかにされた。同時に、イギリスの重工業において特に鮮明にみられる〈縦断的統合〉の形成などは、概念的には独占資本であるとしてよいのではないか。そのようにも考えられたのであった。

けれども、そのことを証明するためには、少なくとも産業革命の確立期からのイギリス資本主義発達史の路線上において、こうした形態変化を把握することが必要であると考えた。そこで、上記の書物の内容は、イギリスにおける独占資本と称されてよいものの全面的な形態発現と、それにいたるまでの19世紀のイギリス経済の史的展開との究明をともに行なうものに図らずもなっていたのであった。

そこで学んだことは、このような独占資本の実態を分析するに当たっても、

また、イギリス経済の発達史を跡づけるに際しても、この国の国内経済の場に視野を限定して考察するだけでは、きわめて不十分なものになる。そればかりでなく、それでは誤ったものになるということであった。

しかしながらなお、この研究の段階においては、世界経済については、国民経済の対外的諸関係であるという認識の次元にとどまっていた。内部の国民経済と外部の国際経済という形で世界経済を二元的に認識する傾向から脱却していなかった。自立した存在形態としての〈資本主義の世界体制〉を認識しうるまでにはいたっていなかった。

とはいえ、こうした認識へと進んでいく緒が、前記の研究成果にもとづく発展的課題を追究していく過程において開かれていくことになった。イギリスの独占資本や金融資本の特殊形態の究明を行なった結果、一般的に独占資本や金融資本といった概念についての理論的な再検討を行なう必要が痛感されるにいたり、引き続いてこれを追究する方向に研究の道を定めたことが、それであった。

契機となった帝国主義研究　そこで新たな研究課題は、こうした概念装置を中心に据えて構成される帝国主義論を洗い直して、これを再構築していくことに定められたのであった。そして、この新たな研究の成果が、最初の書物が刊行されてから約5年半後の1967年の秋に出された『帝国主義論序説』（ミネルヴァ書房）であった。

独占資本や金融資本という概念は、資本主義の生産力の発達段階にかかわる〈生産の集積〉という範疇に基礎づけられている。この点に着目して、この範疇について追究し、これを基底的範疇として帝国主義論構築の構想を打ち出したのが、この新たな研究の内容であった。

では、こうした生産力の発達段階は、どのようなものとして表徴されるべきものであろうか。私は、重工業が主導産業となる資本主義の生産力の発達段階として、これは表徴されるべきものと考えたのであった。そして、『独占資本イギリスへの道』においてすでに明らかにした諸事実にもとづきながら、この産業部門において〈生産の集積〉が、〈縦断的統合〉の形態をとってみずからを現わすようになったとき、独占資本の形態が生まれてくると規定したのであ

った。

ところで、〈生産の集積〉という範疇に着目することによって、帝国主義にかかわる主要概念は、形態的には異なって現れてくるけれども、これは主要国を通じて本質的には共通して把握できるという論理が導き出されとも考えたのであった。とすれば、重工業を主導産業とする生産力の発達段階とは、特定の国民経済の発達段階にかかわるものではない。それは、資本主義の世界史的な発達段階にかかわるものとしてとらえられなければならないことが、ここによりやく自覚されてきたのであった。

世界資本主義の研究への接近 この自覚を発展させて、これを資本主義の世界体制への認識に高める契機となったのが、京都大学人文科学研究所において河野健二教授をリーダーとして組織されていた〈共同研究 世界資本主義〉への参加の機会を与えられたことであった。

資本主義の世界体制は、生産力の発達の段階に応じてその主導産業を交替させ、また、この生産力の発達の段階に規定されて世界的な産業構造と市場構造との編成を変化させていくこと。そして、資本主義の世界体制は、1820年ころから19世紀中葉ころまでは綿工業資本主義の段階、この中葉ころから1870年ころまでは鉄工業資本主義の段階、それ以降第1次世界大戦勃発期までは重工業資本主義の段階として押さえることができること。さらに、こうした発達段階の差異に応じて、資本主義の世界体制の内的な重層構造は異なった内容のものになること。こうしたことを、この共同研究への参加を通じて教えられたのであった。

この共同研究の成果として、1970年には『世界資本主義の歴史構造』（岩波書店）が刊行された。私は、この書物のなかで「重工業資本主義と資本輸出——世界資本主義の第Ⅲ段階（1870-1914年）——」の執筆を担当することになった。そして、資本主義の世界体制に対する私の認識は、そのときにはすでに不動なものになっていたのであった。

さらに私たちは、帝国主義論については、その方法に関する徹底的な検討が必要であるとも考え、同志社大学人文科学研究所における〈共同研究〉を通じて、この課題に取り組んだのであった。その研究成果は、1973年に『帝国主義

研究 I 帝国主義論の方法』(御茶の水書房)と題して刊行されることになるが、そこでまた、次のようなことを学んだのであった。つまり、いままでの帝国主義論理解にはいずれも難点がある。では、何ゆえにこうした難点が生じているか。1つには、帝国主義論の対象は、特定の発達段階における資本主義の世界体制であることが十分に認識されていないからである。また2つには、帝国主義的な経済的諸要素は、連関し一体化しているものであることが理解されていないからであるということであった。

そこで、このように学んだことを拠りどころとして、帝国主義論の〈対象と方法〉との関連について私なりに追究し、その成果を1973年に『帝国主義論への道』(ミネルヴァ書房)として刊行したのであった。このころには、資本主義の世界体制に対する私の認識は、研究のライトモチーフにまでなってしまっていたように思われるのである。

資本輸出史の重要性の認識 ところで、イギリスの資本輸出史それ自体の重要性が認識されたのは、私自身にとっても、かなり以前のことであった。19世紀におけるイギリスの経済が、資本輸出に重心をおいて発達してきたことや、こうした発達の態様とイギリスの独占資本や金融資本の形態的特殊性の発現とが関連していることは、最初の『独占資本イギリスへの道』においても、すでに指摘されていたのであった。

しかしながら、なおそこでは、資本主義の世界体制とのかかわりにおいて資本輸出を押さえるという意識は、芽生えてはいなかった。こうしたかかわりにおいて資本輸出をとらえる最初の契機となったのも、前述の〈共同研究 世界資本主義〉への参加であり、こうした観点に立っての最初研究成果が、さきの『世界資本主義の歴史構造』に収められた私の論文(入江節次郎〔126〕)であった。

この論文において私は、1870-1914年の重工業資本主義の段階の世界資本主義においては、資本輸出が、その再生産循環の不可欠な脈管となっていることを浮きあがらせようとしたのであった。けれども、こうした規定づけは、資本輸出について段階を遡って歴史的な追究をみずから丹念に行なったうえでなされたものでは決してなかった。いわば歴史の横断面を対象として設定し、これ

ついて究明しながら、大胆にこのように規定したのであった。したがって、私自身にとっても、この規定はあくまでも仮説にすぎなかった。同時に私は、歴史的に遡って資本輸出を究明していかなければならないという課題を、1970年ころからみずから背負うことになったのであった。換言すれば、このころから私は、イギリス資本輸出史追究の課題を温めていくことになっていったのであった。

けれども、私は、これに直ちに取り組んでいくことができなかった。さきの『帝国主義論への道』の執筆も果たさなければならなかったし、『帝国主義研究Ⅰ 帝国主義論の方法』に結実した共同研究の取り纏めの仕事もしなければならなかったからであった。そして、これら2つの原稿を出版社に渡したのちは、さらに『帝国主義研究Ⅱ 帝国主義の古典的学説』（入江節次郎〔127〕）に集約された共同研究の仕事を果たしていかなければならなかったからであった。この共同研究もまた、帝国主義の時代についてではあったが、資本主義の世界的総体の認識の重要性をさらに強く印象づけるものとなったのであった。

ところで、この〈帝国主義の古典的学説〉についての共同研究での私の分担課題は、〈J. A. ホブソンの帝国主義分析〉に定められたが、これがまたイギリス資本輸出史研究の重要性を再認識させる契機となったのである。

資本輸出史研究の重要性の再認識 J. A. ホブソン (John Atkinson Hobson, 1858-1940年) の帝国主義分析は、資本主義世界におけるナショナリズムとインターナショナリズムとの調和関係が破れるところに帝国主義が現れる。そして、これを破るもっとも重要な経済的要素が資本輸出であるとするものであった。ところが、資本輸出は帝国主義期以前から行なわれているものであるとして、彼の理論は多くの論者によって批判の対象にされるものともなっていくのである。

もっとも、ホブソンの資本輸出理解の前提には〈資本の過剰〉についての段階的な把握があった。つまり、資本主義という体制は、資本の過剰を生み出す体質をもっている。しかし、〈独占〉が現れる以前の段階の資本主義のもとは、この過剰は経済恐慌の過程を通じて処理されていった。だが、〈独占〉の段階になると、これでは処理されなくなったとするのである。このように彼はとらえているわけであるから、その批判者たちが資本輸出それ自体のみを取り

出して批判するというのは、誠に一面的であるといわなければなるまい。

また、ホブスン、は、資本輸出がすべて帝国主義的に発動するというのでもない。先進地域に向けて行なわれるときには、これはそのようにはならない。後進地域に向けてなされるとき、資本輸出は帝国主義的に発動することになる。このようにとらえて、その理由について実に詳しく分析しているのである（詳しくは、入江節次郎〔127〕、177-180 ページ、参照）。この理由づけは、重要な意味をもっているのである。だから、この点にも触れないホブスン批判もまた、一面的であるといわなければなるまい。

それにしても、ホブスンの帝国主義分析について研究を進め、その続出している批判者の主張に接すれば接するほど、資本輸出史の研究の重要性を再認識させられることになったのであった。

〈自由貿易帝国主義〉の主張など さらに、資本輸出史の研究を促迫するいくつかの契機を私は与えられた。

1 つには、ギャラハ＝ロビンソン (Gallagher, John and Ronald Edward Robinson) によって唱道し始められた 〈自由貿易帝国主義〉について私なりの対応をしなければならないということであった。周知のように、この主張は、可能な場合には非公式な手段によって、また、必要な際には公式の併合を通じて、イギリスがその世界的な覇権を変わることなく維持した。このように結論づけて、19世紀を通じてのイギリスの帝国支配を一貫させてとらえるというものであった。J. A. ホブスンとローザ・ルクセンブルク (Rosa Luxemburg, 1871-1919年) との帝国主義分析との関連において、この見解の学説史的系譜を定めることも重要な課題とされよう。だが差し当たっては、この「非公式の手段」とされているものと資本輸出との関連を解明する必要があるとも考えたのであった。

2 つには、世界資本主義の全歴史は、中枢＝衛星構造の再生産の過程であると説く A. G. フランク (Andre Gunder Frank, 1929-) の説、また、これは、中心部資本主義と周辺部資本主義との関係の再生産の過程であるとする S. アミン (Samir Amin, 1931-) の考えかたについての対応をも迫られたことであった。これらについても、私は、資本輸出史の研究を進めることが、こうした

問題提起に対する解答になろうと考えたのであった。

1820年代を主対象に　そこで、さきの『帝国主義研究』に関する仕事が一段落したのち、帝国主義研究に区切りをつけるための『帝国主義の解明』（新評論、1979年）（入江節次郎〔128〕）の執筆や、角山 栄教授を総編集者とする『講座 西洋経済史Ⅲ帝国主義』（同文館出版、1980年）の取り纏めの仕事や、そこでの担当論文である「〈大不況〉と資本主義の構造変動」の執筆を進める一方、私は、いよいよイギリス資本輸出史の研究に本格的に取り組むことになったのである。

そして、この課題を追究していくには、その〈前史〉をも含めて資本輸出の本格的展開期である1820年代をまず主対象として設定するのが適當であると考えたのであった。〈結び〉において記したように、このことによって何よりも資本輸出の発生史が明らかになると思われたからであった。

しかし、その理由は、これだけにとどまるものではなかった。イギリスの産業資本の成立の前提として、奴隷貿易を軸としたイギリス－西アフリカ－西インドを結ぶ〈三角貿易〉展開の歴史があったことについては、すでに E. ウィリアムズ（Eric Eustance Williams, 1911-1981年）の研究（Williams〔305〕、参照）を通じて明らかにされているところであった。では、産業資本主義の確立にとって、対ラテン・アメリカ投資を含む1820年代のイギリスの資本輸出は、どのような意味をもつことになるのか。このことが明らかにされなければならないと、考えられたからでもあった。前述の〈自由貿易帝国主義〉などの比較的新しい衝撃的な諸主張への1つの適切な学問的な対応の仕方にもなろうと思ったからでもあった。

それ以上の意味も含まれていた。特にこの〈前史〉の究明を通じて、ナポレオン戦争（1793-1815年）やラテン・アメリカ諸国の独立戦争（1809-1824年）が、産業資本主義の確立に対してもった経済的意義が明らかになるとも考えられたからでもあった。

本書刊行への経緯　この研究の最初の結実は、「1820年代におけるイギリスの資本輸出」(1)(2)（『経済学論叢』〔同志社大学〕第27巻第3・4号；第28巻第1・2号、1979年3月；1980年5月）として発表された。しかしながら、これは、日本にいるために制約された文献資料にもとづく研究であった。そこで私は、イギリスにおけ

る在外研究期間中の1980年6月上旬から約3ヵ月間、ロンドンの The British Library や The Goldsmiths' Library などに籠もって、このテーマに関する文献探索の仕事に専念したのであった。こうした文献資料の宝庫に所蔵されている先人の知的遺産を甦らせる作業を通じて、イギリスの資本輸出の歴史的形象を浮き出させることができたことは、無上の楽しみであり、喜びでもあった。

そして、こうした宝庫において作成したノート類やコピーをした資料類をもとに、私は上述の『経済学論叢』の第29巻第5・6号(1981年6月)から5回にわたって、このテーマに関する一連の〈文献資料の補遺〉を発表することになったのである。

こうした作業を経て、上記の論文や資料補遺をベースとして新たに一冊のものに書き下ろす仕事に着手し、ここによりやく上梓する運びとなった次第である。上記論文が徹底的に書き改められ、再構成されていく過程で、いくつかの分析上の修正がなされたことも、ここに付言しておきたい。

思えば、本書の刊行は、数多くの人たちによる文献資料利用上の便宜の供与に負っていることであった。なかでも、イギリスの人では、The British Library の Official Publications Library において多くの日本人研究者に親しまれているカイゼル髭のベテランのライブラリアン、また、The Goldsmiths' Library の Mrs. Dee Berkeley の恩を忘れることができない。前者については、その該博な文献知識に驚かされたし、後者については、日本からやってきた一介の研究者に対する心温まる配慮に感激したことでもあった。

日本の研究者では、ロンドン大学の森嶋通夫教授をはじめとして、以下、併記することになり失礼とはなるが最少限に掲げると、一橋大学の杉山忠平、茨城大学の武井邦夫、慶応義塾大学の玉置紀夫、日本大学の野口建彦、京都大学の服部春彦、岡山大学の土生芳人、東京経済大学の藤井速實などの諸教授から、研究専攻別の枠を越えて、文献資料利用上の便宜を与えられたことであった。あえてここに記して謝意を表したい。

また、本書における研究の達成も、多くの人たちの学恩に負っていることであった。最大の恩人としては、何といてもイギリスの資本輸出史研究の先駆

者であり、*The Migration of British Capital to 1875* という古典的研究書を出されたジェンクス (Leland Hamilton Jenks, 1892-) の名をあげなければならないであろう。

この研究に結実した分析の仕方にかぎっていえば、とりわけ資本主義の世界体制への認識を植えつける契機を与えられた京都大学人文科学研究所の〈共同研究 世界資本主義〉を組織されていた河野健二教授と飯沼二郎教授。そして、この研究に参加されていた角山 栄教授などの諸氏。それからまた、私のこの研究の構想を最初に発表した〈イギリス資本主義研究会〉(1978年3月)において貴重な批判や助言をされた生川栄治教授をはじめとするこの研究会のメンバーの人たち。これらのかたがたに対して心からのお礼を申しあげなければならない。

さらに、経済学の純粋な学術書の出版がきわめて困難な条件下にあるにもかかわらず、このような書物の出版を好く引き受けられた新評論の美作太郎会長と二瓶一郎社長とに対して深く敬意を表したい。それとともに、この書物の完成のために尽力された同社編集部の藤原良雄部長と池谷郁代部員との労を心から多としなければならない。

このように多くの人たちに援助されながら、ここに私は、ライフ・ワークの1つを刊行できるようになった次第である。顧みれば、研究生活にはいつて以来の長い間の紆余曲折を経たのちに、ようやく研究の新たな地平を展望できる地点にたどり着いた思いがするのである。誠に感なきをえない。

1982年 8 月盛夏

緑濃き窓外からの光に浴しつつ

同志社大学光塩館研究室にて

入 江 節 次 郎

イギリス資本輸出史研究——目次

はしがき	1
資本主義の世界性の認識への道／契機となった帝国主義研究／世界 資本主義の研究への接近／資本輸出史の重要性の認識／資本輸出史 研究の重要性の再認識／〈自由貿易帝国主義〉の主張など／1820年 代を主対象に／本書刊行への経緯	
序 説 この研究の意義と本書の構成	23
1 資本輸出史研究の意義	23
A 経済の世界的連関性の歴史的究明	23
資本主義は世界体制として成立／資本主義経済の世界性の認識／経 済の世界的連関の軸としての資本輸出／土地と資本輸出／貿易と資 本輸出／外国政府債への投資と貿易／対外民間投資と貿易	
B 世界経済史研究の一方法として	28
世界経済史研究の困難性の克服／一国経済史的立場を越えて	
C 資本輸出の理論的諸問題と段階的特質究明との関連	30
理論的諸問題との関連／最近の理論的成果に照らして／段階的特質 究明との関連／段階的究明をまず	
2 本書の構成	34
長い歴史をもつ資本輸出／資本の循環との関連を重視／1820年代ま での資本市場の発達／1820年代の投資ブーム／1825年の経済恐慌と のかかわり	
I 資本輸出の概況 ——国際収支経常勘定よりみて	39
資本輸出の重み／国民所得に対比して／数字的推移と実態／貿易収 支との関連	

Ⅱ 貿易の構造	45
1 貿易の概況	45
輸出入に関する総括的な統計／〈輸入先行型〉の貿易構造	
2 輸出入の品目別構成	47
A 輸出の品目別構成	47
圧倒的に完成工業製品を／大きな比重の綿製品輸出／綿製品輸出の 増大傾向	
B 輸入の品目別構成	51
食料品や原料の輸入が圧倒的／輸出の内訳と対応させると／貿易構 造の軸	
C 再輸出の品目別構成	55
食料品などの再輸出の停滞傾向	
3 輸出入の地域別構成	58
A 輸出の地域別構成	58
比較的先進地域の後退傾向／発展していくラテン・アメリカ市場	
B 輸入の地域別構成	62
ラテン・アメリカ市場の位置	
Ⅲ 綿工業の生産力と市場との構造	63
1 資本主義的綿工業の確立	63
〈世界の綿工業〉として／豊富な棉花供給に支えられて／棉花価格の 下落	
2 綿工業の生産力構造	68
A 綿糸部門	68
綿糸部門の近代化を先導として／生産力の増大——綿糸のコストの低 下	
B 綿布部門	71
綿布のコストの低下／綿布部門の生産力の増大	
3 綿製品の価格と利潤	73

綿製品全般の価格の動向／綿紡績部門の利潤率の低下傾向／マー
ジンの大きい綿布の輸出

4 綿製品の市場構造とマーチャント・バンカー 79

輸出比率と安価な製品の輸出／綿製品の地域別輸出／ラテン・アメ
リカ市場の重み／綿工業の貿易金融／貿易金融におけるマーチャ
ント・バンカー

IV 資本輸出の歴史的背景——資本市場の発達と

マーチャント・バンカー 87

1 ナポレオン戦争期の公債発行の増大

とマーチャント・バンカー 87

戦争期の国家経費の膨脹／政府の借入れの増大／公債発行の増加
と資本市場／〈公債引受組織〉の確立／公債の〈大口引受業者〉と
してのマーチャント・バンカー／陸軍費の増大とマーチャント・バ
ンカー／大陸での陸軍費の支出に関連して／イギリス公債の外国で
の販売も

2 ナポレオン戦争期の同盟国への貸付けや援助

とマーチャント・バンカー 102

貸付けや援助の額／同盟国の対イギリス借款／同盟国への援助金／
援助金の使途／援助金の送金や支払い／マーチャント・バンカーの
数の増加

3 ナポレオン戦争後の外国政府債の発行

とマーチャント・バンカー 110

A ベアリング社 110

アメリカ連邦債の引き受け／メキシコからの銀の輸送／賠償金支払
いのためのフランス政府債の発行／フランス政府債の引き受け／フ
ランス政府債の引き受けを通じて／オーストリアとロシアとの政府
債の引き受け

B ロスチャイルド 119

プロシア政府債の引き受け／ロスチャイルドの利子保証

C	1819年ころの対外投資残高とその趨勢	121
	〈議会委員会〉での証言を通じて／1819年ころの外国政府債への投資 の趨勢／当時の外国政府債の買手／商品貿易の増大	
V	投資ブームとその背景	129
	投資ブームの概況／貨幣市場における資金の供給状況／資金の潤沢 化の指標／国家経費の減少	
VI	国内における会社設立ブーム	139
1	鉄道業など公益事業	139
	〈鉄道時代〉の前夜／1820年代の鉄道建設／投資ブームを促進／ガス 事業／水道事業／ドック／運河と有料道路／橋梁とトンネル	
2	一般産業	148
	鋳山業／海運業／酒造業／乳業、製粉・製パン業／製塩業／煉瓦や ガラス製造業／その他の業種	
3	金融部門	153
	銀行業／保険事業	
4	会社設立ブームにみられる特徴	156
	ブーム期以前に設立された会社数と比較して／その他の会社群／多 様な業種にまたがる／国内の会社設立ブームと対外投資	
VII	ヨーロッパ大陸の諸政府への投資	163
1	ヨーロッパ大陸諸国の政府債の発行	163
	ラテン・アメリカ以外への民間投資も／ヨーロッパ大陸の諸政府債 の一覧表／一覧表にみられる諸特徴／ロスチャイルドの重み	
2	オーストリア政府債などの発行	169
	オーストリア政府債の発行をめぐる／フランス政府債の発行をめ ぐる／スペイン政府債の発行	
3	ギリシア政府債の発行	173
	1824年のギリシア政府債の発行／軍艦の建造と1825年のギリシア政 府債の発行／小艦隊の編成／2隻のフリゲート艦の発注／フリゲー	